

## 日本語母語話者にみる受動文使用の実態について

### Usage of Passive Voices by Japanese Native Speakers

安田 春子\*, 小野由美子\*\*, アタ・ハティジェ・バーヌ\*\*\*

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748

\*鳴門教育大学大学院言語系(国語)コース

\*\*鳴門教育大学言語系(国語)教育講座

\*\*\*鳴門教育大学大学院言語系(国語)コース

Haruko Yasuda \*, Yumiko Ono \*\*, ATA Htejye Banu \*\*\*

\* Japanese Language Education, Graduate course, Naruto University of education

\*\* Japanese Language Education, Naruto University of education

\*\*\* Japanese Language Education, Graduate course, Naruto University of education

**抄録:** 本研究は「トルコ語を母語とする日本語学習者の受動文習得の研究」の一環として行ったものである。18の受動文を日本語母語話者に示し、自然・不自然かを選択してもらい、それぞれの受動文に対する母語話者の選択数を調査した。また与えられた場面で能動文・受動文のどちらを使用するかを作文の形で調査を行った。その結果、2つの間接受動文に選択の揺れが見られ、年齢別によって選択に差があることも明らかになった。また使用については、自分に起こった出来事を表現するときには受動文が多く用いられるが、第3者の立場から物事を見た場合、受動文の使用が少なくなり、能動文を使う傾向がみられた。

**キーワード:** 受動文 間接受動文 使用率 視点

**Abstract:** This study is a part of a larger research on acquisition of passive voices by Turkish Learners of Japanese Language. In this study, 18 sentences of passive voices were shown to Japanese native speakers to judge natural or unnatural. A composition test was also given to find out which of active and passive voices be preferred by Japanese natives in certain situations. The results show that the judgments of natural / unnatural of indirect passive voices are different by age under in certain cases. The usage of passive voices in compositions indicates that more passive voices may be used when the respondents describe the events in which they are involved, while more active voices may be used when the respondents describe the events as a third person.

**Keywords:** Passive voice Indirect Passive voice Usage rate Viewpoint

#### 1. はじめに

日本語の受動文はヴォイスの範疇の一つとして位置づけられている。寺村(1982)は受動文を「動作・作用の主体が、他の何ものかに働きかける場合に、動作主、つまり働きの発するところを主役とするのではなく、働きをうけるもの、働きの向かう先を主役として事態を描く表現である」(p.212)としている。そしてそれが文法的に受動文と認定されるには一定の形態的特徴、統語的特徴、意味的特徴を具備していなければならない。(寺村, 1982 村木, 1991 益岡, 1982) 形態的特徴とは、動詞の語形が「-are(ru), -rare(ru), -sare(ru)」をつけた派生形であること、統語的特徴とは「XがYにV-are/rare(ru)」という関係があること、意味的特徴とは、以下のような

特徴を具備していることである(寺村, 1982)。

- ・ YがV-の動作・変化・出来事の主体であること。
- ・ Xが「YがVスル」ことによって影響を受ける主体であること。

以上のような条件のもと、受動文は大きく二つに分けられている。すなわち「直接受動文」と「間接受動文」である。直接受動文は受動文の主体とそれに影響を与える出来事との関係が直接的なもので、「花子が太郎に殴られる」のような例文があげられる。間接受動文はその関係が極めて間接的なもので、「持ち主の受動文」と「第3者の受動文」に下位分類されている場合もある。持ち主の受動文は「財布を盗まれる」「足を踏まれる」など、自分の所有物に対する動作の影響を示している。第3者の受動文は「雨に降られた」「彼に先に論文を発表された」

などがあり、谷森（2000）は第3者の受動文における主格成分は、元の文とされる対応文には必須構成要素としては含まれないと述べている。今回の調査でもこれら3つの受動文を動詞の形態や統語的面からみて不自然だと感じるもの、自然だと感じるものに分けそれぞれ作例した。

しかし本研究ではそれ以上に受動文の持つ意味的特徴を重視した。それは本研究がトルコ人学習者を対象にした研究の一環であることを考慮したためである。母語話者以外の者が日本語の受動文を学習するとき、単に動詞の形態や統語面だけを覚えていれば機能的に受動文ができるという訳ではない。受動文が持つ意味、機能を理解していなければ実際の会話などで正しい用法として産出されないという難しさがある。では日本語の受動文の持つ意味的特徴とはどのようなものだろうか。

日本語古来の受動文の特徴として、「いじめられる」「しかられる」「ぬすまれる」など被動作主の被害・迷惑を表現することが挙げられている（金水，1991）。しかし被害や迷惑以外でも受動文を使用する例はたくさんある。

用例1 先生にほめられた。

用例2 大好きな彼にプロポーズされた。

用例1、2が示すように一概に被害・迷惑だけを受動文の特徴としてみることもできない。また公の場で使用される書き言葉などには、中立的な受動文が多く用いられている。（許，1999 金水，1991）しかし今回の調査ではトルコ人学習者に分かりやすい形で受動文の不自然さを示したいと考え、調査に用いた文は被害や迷惑に意味的特徴を置いて作例した。

それでは我々日本人が能動文より受動文を選択する理由は何であろうか。奥津（1983）、金水（1991）、坂原（2003）の論から以下のような理由が考えられる。

用例3 動作主よりも動作の対象に興味がある場合。

例：この詩は光太郎によって書かれた。

用例4 動作主が明らかで述べる必要がない、あるいは述べるのが難しい場合。

例：公園に仮設住宅が設置された。

用例5 ある出来事によって影響を受けた主体の被害や迷惑を表現したい場合。

例：電車の中で財布を盗まれた。

用例6 一度立てた主語を途中で変えないようにするため。

例：都会から子どもたちがやってきた。そして村長によってすぐに地元の人たちに紹介された。

このような受動文の選択理由は本調査のアンケートⅡ（絵を見て、場面を説明する文を作成する）にも重要な影響を及ぼしている。また被害・迷惑と利益・恩恵などの受動文の意味特徴はヴォイスという範疇の中で、「受益

文」や「使役文」とも密接な関係をもってくるので、受動文使用には注意が必要である。しかし、日本語母語話者がこのような受動文の位置づけや意味特徴を、日常生活の中で意識して使用しているというのは考えにくい。

本稿では受動文を「直接受動」「持ち主の受動」「第3者の受動」の3種に分け、日本語母語話者が各受動文をどのように認識し捉えているのかを考察する。

## Ⅱ. 先行研究

日本語母語話者の受動文使用に関する調査は幾つか挙げられる。渡邊（1995）は中国人学習者と比較して日本語母語話者の受動文の使用実態について調査している。同様に佐藤（1997）は英語話者と比較して、日本語母語話者の受動文の使用実態を述べている。いずれも4コマ漫画や絵本を示し、発話における受動文の使用実態を分析したものである。渡邊の結果では、中国人学習者と日本語母語話者の受動文使用に大きな差がないこと、母語話者が受動文を使用する場面で、学習者が能動文を使用するということが、逆に母語話者が受動文を使用しない場面で、学習者が使用するという結果を報告している。佐藤は調査結果から英語母語話者が能動文の使用が圧倒的に多いのに対して、日本語母語話者は受動文や授受表現の使用が多いことを指摘している。

また許（1999）は日本語と韓国語における受動文の使用率を調査するため、両国の新聞コラムとテレビドラマのセリフを比較した。その結果両国の受動文は言語生活の場面においては使用率が低い、書き言葉においては頻繁に使用されていることを挙げている。また日本の新聞コラムでは有生物の受動文より、無生物の受動文が多く、テレビドラマでは無生物より有生物のほうが多いということも明らかにしている。

## Ⅲ. 本研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

- 1) 日本語母語話者の受動文認識の実態を明らかにする。
- 2) 各場面における受動文使用の実態を明らかにし、日本語母語話者の視点の置き方を考察する。

本研究は先行研究に沿うものであるが、以下の2点で違いがある。一つは、従来の研究では漫画や絵を見せて第3者の立場から物事を述べる発話中心の調査や、新聞やドラマから受動文を抽出する方法がとられてきたが、本研究では作例した受動文を示し、その受動文が自然か不自然かを問う母語話者の認識を調査した点である。もう一つは、ある場面を提示し回答者がその場面の当事者として述べる場合と、第3者の立場からある出来事を述

べる場合とに分けて、受動文の出現率をみたことである。

#### IV. 調査用紙の作成

受動文の認識と使用の実態を明らかにするため、アンケートを2部に分けて構成した。1部は直接受動・持ち主の受動・第3者の受動の3種類の受動文を18例(注2)示し、それぞれの受動文が自然か不自然かを選択してもらう方法をとった。受動文の種類によって許容に差があるかどうかを見るため、5つのカテゴリー {①直接受動(無生物主語) ②直接受動(有生物主語) ③間接受動(持ち主) ④間接受動(第3者の受動) ⑤受益} に受動文を分け、母語話者に示した。

2部では5つの場面を設定し、それぞれの絵を見て自由に文を作成してもらう方法をとった。場面1,2では母語話者が絵の中の人物になって、回答者自身に起こった出来事を友人に電話で伝えるという設定で記述してもらった。場面3,4は自分が第三者として目撃した出来事を他人に伝えるという設定にした。アンケート用紙には絵だけを示し、使用する語彙や文量は各自の自由とした。

#### V. 調査対象

日本のN大学に通う学生・教職員144名を対象に平成16年3月から6月の間にかけて実施した。被調査者の内訳は表1の通りである。

表1 被調査者144名の内訳  
(※年齢不詳者男1名を除く)

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
男	3	19	15	23	11	2	73
女	7	46	11	6	0	0	70
合計	10	65	26	29	11	2	143

#### VI. 結果と考察

##### VI-1. 受動文の許容について

18の受動文を自然・不自然のどちらかで選択してもらい、自然とした者の数を「自然を選択した者の割合(自然選択率)」としてあらわした。全体の結果を表2、男女、年齢別の結果を表3、表4に示す表中の「予」とは調査者の「予測」であり、調査をする前に調査者独自の判断で正用、誤用を判断し、正用を「○」誤用を「×」として表示した。また「一致」としたのは、調査者の「予測」と母語話者の回答が一致したかどうかを示すため表示した。表2の「予測」で調査者は正用・誤用の予測を立て、9つの誤用文を挙げた。なぜ誤用としたかについて、動

詞の形態や、統語面、意味面から考えた。

以下の9例について、簡単にその理由を記す。

##### <誤用とした9例とその理由>

###### ・(15)うわさにひろまられました。

うわさは自然に広がるもの、あるいは誰かが広めるものであり、「広がる」という自動詞を受動形にしているのが不自然である。

###### ・(18)毎朝、コーヒーは鈴木さんに飲まれています。

一般的な事実を表すことであるのに、二格に「鈴木さん」という個人的な人物を置いていることに不自然さを感じる。

###### ・(8)花子はコンピューターに故障されました。

有生物の主語「花子」に対して、無生物の「コンピューター」が二格に据えられていることが不自然である。

###### ・(16)太郎は花子に本を貸されました。

「花子が太郎に本を貸した」という事実であるので、ここでは受益の表現を用いて「貸してもらった」とするほうが自然である。

###### ・(14)私の頭が太郎に殴られました。

持ち主の受動であり、主格に「頭」を持ってくるのではなく「太郎に頭を殴られた」として、ヲ格に「頭」を据えるほうが自然である。

###### ・(4)会社に給料を上げられました。

受動文は本来、迷惑を表す表現であり、給料が上がることは当事者にとっては喜ばしいことである。この場合は「上げてもらった」や自動詞を使い「上がった」とするほうが自然である。

###### ・(7)急に物価に上がられました。

物価が上がるというのは、自然にそうなることであり、自動詞を使用した動詞の形態に不自然さを感じる。

###### ・(12)太郎は旅先で雨にやまれました。

旅先では大半の人が晴天を望むものであり、雨が止むということは旅を続ける上で望ましいことである。従って受動文を使うのは不自然である。

###### ・(5)母に大切な本を捨ててもらいました。

大切な本を失うことは被害であるから、ここで利益を表す「もらう」を使うのは不自然である。「捨てられた」とするほうが自然である。

##### VI-1-1. 受動文の認識についての結果

表2, 3, 4より以下のことが明らかになった。

- 1) 母語話者全体の結果では、(17)(3)のみが自然・不自然のどちらか一方に3分の2以上の回答数を得ることができず、選択に揺れが生じていることがうかがえる。しかしその他の受動文においては、自然・不自然の選択が明確に別れ、調査者の予測と一致した。
- 2) 属性による結果では、男女差による認識の違いは見

られなかったが、年齢別では5つの受動文{(6)(14)(4)(7)(10)}に有意差がみられた(注2)。

3) 有意差はなかったが有意傾向が見られたものに、男女別では(5)の受動文に、年齢別では(1)(16)の受動文があった(注3)。

## VI-1-2. 受動文の認識についての考察

ほぼすべての受動文において母語話者の認識は、「自然」か「不自然」に明確に別れ一致していると言える。また筆者がたてた予測とも合致しており、予測が「○」のものは「自然」が有意に多く、予測が「×」のものは「不自然」が有意に多くなっている。全体の結果から、(17)の「いつも先生に息子をしかられます。」(3)「花子は先に子供に死なれて、悲しい。」という受動文に母語話者の判断の揺れが見られた。いずれも間接受動文であるが、調査者の「○」の予測に反し、(17)では「不自然」と回答したものが91人で、「自然」の52人を上回っている。また(3)も「不自然」と回答したものは53人で「自然」の90人には劣るものの、3分の1以上のものが「不自然」と回答していることになる。(3)の受動文については後に述べることとし(注4)、(17)の受動文について考えてみたい。

(17)を「不自然」と考える理由として、「息子を」ではなく「息子が先生にしかられる」としたほうが自然だと思ったという意見があった。(17)は(13)「だれかに財布を盗まれた」と同様に持ち主の受動文であるのに、(13)の自然選択率と比べるとかなりの差で低くなっている。これは話し手の心理、あるいは視点の置き方が関

わってくるのではないだろうか。「XがYにZヲ〜ラレル」のZはあくまでXに属しているものにすぎず、影響の受け手はXということになる。財布などの所有物や身体の一部で無生物の場合、「もの」に感情移入することなく影響を受けるXがクローズアップされることになる。しかし「息子」の場合は「人」であり親子である。「しかられた」という被害を間接的にX(親)にもってくるのではなく、ガ格に「息子」を据えて「息子」を主体にしたという心理的な働きがあるのではないかと考えられる。

男女別では差がなかったのに対し、年齢別では5つの受動文に有意差が見えたことは興味深い。特に29歳以下の若年層では(14)「私の頭が太郎に殴られました。」(4)「会社に給料を上げられました。」(7)「急に物価に上がられて困っています。」の受動文で予測に反して「自然」と答えた人数が有意に多く、また逆に(10)「太郎は旅先で雨に降られました。」は「不自然」とする人数が有意に多かった。30歳以上の中年層では上記の受動文は予測と一致しているのに対し、若年層でこれと反対の結果がでているのは世代間の言語感覚の相違を示す一例とも考えられるのではないだろうか。しかし(6)「海は山にさえぎられて見えませんでした。」は30歳以上のものが予測に反して「不自然」とする人数が有意に多くなっている。これについてはなぜこのような結果がでるのか今回明らかにすることはできなかったが、年齢別に有意差がでた受動文は5つのうち4つが間接受動文となっている。内、「持ち主の受動文」が2つ、「第三者の受動文」が2つである。間接受動文で年齢による違いがでるのはなぜだろうか。

表2 母語話者144名の選択と自然を選択した割合

分 類		例 文	予測	自然(人)	不自然(人)	自然選択(%)	一致
直接	無	(6)海は山にさえぎられて見えませんでした。	○	125	18	87.4	○
		(1)りんごはアメリカから輸入されています。	○	118	26	81.9	○
		(11)テストが終わり回答用紙が回収されました。	○	138	6	95.8	○
		(18)毎朝コーヒーは鈴木さんに飲まれています。	×	7	137	4.9	○
	有	(16)太郎は花子に本を貸されました。	×	4	140	2.8	○
間接	持ち主	(2)先生に名前を呼ばれました。	○	137	7	95.1	○
		(4)会社に給料をあげられました。	×	8	136	5.6	○
		(13)だれかに財布を盗まれました。	○	137	7	95.1	○
		(14)私の頭が太郎に殴られました。	×	19	124	13.3	○
		(17)いつも先生に息子をしかられます。	○	52	91	36.4	△
	第3	(3)花子は先に子供に死なれて、悲しい。	○	90	53	62.9	△
		(7)急に物価に上がられて困っています。	×	9	135	6.3	○
		(8)花子はコンピューターに故障されました。	×	1	143	0.7	○
		(9)一番いい席をとられて悔しい。	○	142	2	98.6	○
		(10)太郎は旅先で雨に降られました。	○	119	25	82.6	○
		(12)太郎は旅先で雨にやまれました	×	3	141	2.1	○
		(15)うわさにひろまられました。	×	0	144	0	○
		受益	(5)母に大切な本を捨ててもらいました。	×	22	122	15.3

間接受動文は直接受動文と比較すると、話し言葉や、中立的な書き言葉、メディアの中で用いられることは非常に少ないということが報告されている（許，1999）。また森（2000）が「学校教育現場では間接受動文についての意識は希薄で、（中略）指導上では取り扱われず看過されているものと思われる。」（p,77）と述べているように、

間接受動文が母語話者の文法教育の中では積極的に指導されていないことを指摘している。これらのことから、間接受動文の意味特徴として、ある事象がある者にとって嬉しくない、迷惑であるときに使うのだということの意識が若年層になるに従って薄れてきていることは十分に予想されることである。

表3 男女別選択数の結果

分 類		例 文	男 74 人			女 70 人		
			自然(人)	不自然(人)	自然選択(%)	自然(人)	不自然(人)	自然選択(%)
直接	無	(6)海は山にさえぎられて見えませんでした。	63	10	86.3	62	8	88.6
		(1)りんごはアメリカから輸入されています。	58	16	78.4	60	10	85.7
		(11)テストが終わり回答用紙が回収されました。	69	5	93.2	69	1	98.6
		(18)毎朝コーヒーマグは鈴木さんに飲まれています。	5	69	6.8	2	68	2.9
間接	有	(16)太郎は花子に本を貸されました。	1	73	1.4	3	67	4.3
	持ち主	(2)先生に名前を呼ばれました。	69	5	93.2	68	2	97.1
		(4)会社に給料をあげられました。	3	71	4.0	5	65	7.1
		(13)だれかに財布を盗まれました。	69	5	93.2	68	2	97.1
		(14)私の頭が太郎に殴られました。	8	66	10.8	11	59	15.9
		(17)いつも先生に息子をしかられます。	31	42	42.5	21	49	30.0
	第3	(3)花子は先に子供に死なれて、悲しい。	48	25	65.8	42	28	60.0
		(7)急に物価に上がられて困っています。	5	69	6.8	4	66	5.7
		(8)花子はコンピューターに故障されました。	1	73	1.4	0	70	0
		(9)一番いい席をとられて悔しい。	73	1	98.6	69	1	98.6
		(10)太郎は旅先で雨に降られました。	63	11	85.1	56	14	80.0
		(12)太郎は旅先で雨にやまれました	2	72	2.7	1	69	1.4
		(15)うわさにひろまられました。	0	74	0	0	70	0
受益		(5)母に大切な本を捨ててもらいました。	15	58	20.3	7	63	10.0

表4 年齢別選択数の結果

分 類		例 文	29 歳以下 75 人			30 歳以上 68 人		
			自然(人)	不自然(人)	自然選択(%)	自然(人)	不自然(人)	自然選択(%)
直接	無	(6)海は山にさえぎられて見えませんでした。	▲70	▽5	93.3	▽54	▲13	80.6
		(1)りんごはアメリカから輸入されています。	66	9	88.0	52	16	76.5
		(11)テストが終わり回答用紙が回収されました。	73	2	97.3	64	4	94.1
		(18)毎朝コーヒーマグは鈴木さんに飲まれています。	4	71	5.3	2	66	2.9
間接	有	(16)太郎は花子に本を貸されました。	4	71	5.3	0	68	0
	持ち主	(2)先生に名前を呼ばれました。	73	2	97.3	64	4	94.1
		(4)会社に給料をあげられました。	▲7	▽68	9.3	▽1	▲67	1.5
		(13)だれかに財布を盗まれました。	73	2	97.3	64	4	94.1
		(14)私の頭が太郎に殴られました。	▲15	▽60	20.0	▽3	▲64	4.5
		(17)いつも先生に息子をしかられます。	28	47	37.3	24	44	35.3
	第3	(3)花子は先に子供に死なれて、悲しい。	45	29	60.8	44	24	64.7
		(7)急に物価に上がられて困っています。	▲8	▽67	10.7	▽1	▲67	1.5
		(8)花子はコンピューターに故障されました。	1	74	1.3	0	68	0
		(9)一番いい席をとられて悔しい。	74	1	98.7	67	1	98.5
		(10)太郎は旅先で雨に降られました。	▽58	▲17	77.4	▲61	▽7	89.7
		(12)太郎は旅先で雨にやまれました	0	75	0	2	66	2.9
		(15)うわさにひろまられました。	0	75	0	0	68	0
受益		(5)母に大切な本を捨ててもらいました。	9	66	12.0	13	55	19.1

▲有意に多い ▽有意に少ない (p ≤ .05)

## VI-2. 絵を用いた場面での受動文使用の傾向

アンケートⅡでは、回答者に絵を見せて状況を示し、それぞれの出来事をどのように相手に伝えるか、作文をしてもらった。場面Ⅰ(a)(b)では回答者が絵中の中の人、つまり当事者になり自分に起こった二つの出来事を電話で友人に話すという場面である。二つの出来事とは年配の男性に「ほめられる」と、友人にテニスに「誘われる」というものである。場面Ⅱも設定は場面Ⅰと同じであるが、出来事は年配の男性に「しかられる」と、女性のハイヒールに足を「踏まれる」というものである。場面Ⅲ、Ⅳは道を歩いていて偶然目にしたある出来事を誰かに伝えてもらうという設定にした。ここでも全体の結果と男女別・年齢別の結果を表5、表6、表7に示す。

### VI-2-1. 受動文使用の結果

表5、6、7より以下のことが明らかになった。

- 1) 全体では場面Ⅲを除いた全ての場面で、高い受動文使用率が見られた。
- 2) 場面Ⅲ、場面Ⅳと同じ客観的な出来事を話す場合でも、受動文使用と能動文使用の二つに選択が分かれた。
- 3) 属性では、場面Ⅲにおいて男女別の差が有意であった(両側検定： $t(1)=4.30$ ,  $p<.05$ )。また場面Ⅱ(d)において年齢別の差が有意であった(両側検定： $t(1)$

$=4.56$ ,  $p<.05$ )。

### 6-2-2. 受動文使用の考察

場面によって受動文の使用に差がみられるのはなぜだろうか。場面ⅠとⅡでは回答者自身についての出来事を述べるものであり、受動文使用が多く見られた。一方場面ⅢとⅣでは、同じ客観的な立場から出来事を述べることも、場面ⅢとⅣの間には受動文の使用に大きな差が見られた。

日本語の受動文は古来、受影者の被害・迷惑を表現することを本務とする(金水, 1991)とあるように、ある出来事から何らかの影響を受けた主体が、その迷惑や被害を被ったことを表現したいときに使われる。また佐藤(1997)の研究では英語母語話者と日本語母語話者の受動文使用の傾向が対極的であることを述べており、迷惑や被害などを叙述する場合、日本語母語話者は話し手の心理的反応を含む表現をするのに対し英語母語話者はその表現を用いるのが少ないことが分かっている。このことより場面Ⅱでは日本語の受動文の持つ意味的特徴がよく現れている結果だと言える。しかし場面Ⅰは「ほめられる」「さそわれる」といった回答者にとって喜ばしい出来事であるのに、ここでも受動文の使用は多い。これは誰に視点を置いて話しをするのかという視点の置き方の

表5 各場面における受動文の使用傾向

( )内はいずれも母集団の人数

	使用(人)	不使用(人)	使用率(%)		使用(人)	不使用(人)	使用率(%)
場面Ⅰ(a) (142)	135	7	95.0%	場面Ⅰ(b) (142)	121	21	85.2%
場面Ⅱ(c) (142)	134	8	94.4%	場面Ⅱ(d) (142)	137	5	96.5%
場面Ⅲ (140)	40	120	28.6%	場面Ⅳ (140)	123	17	87.9%

表6 男女別による受動文の使用傾向

		使用	不使用	使用率
場面Ⅰ(a)	男(73)	69	4	94.5%
	女(69)	66	3	95.7%
場面Ⅰ(b)	男(73)	62	11	84.9%
	女(69)	59	10	85.5%
場面Ⅱ(c)	男(73)	67	6	91.8%
	女(69)	66	3	95.7%
場面Ⅱ(d)	男(73)	71	2	97.3%
	女(69)	66	3	95.7%
場面Ⅲ	男(70)	▽14	▲56	20%
	女(70)	▲25	▽45	35.7%
場面Ⅳ	男(70)	60	10	85.7%
	女(70)	64	6	91.4%

表7 年齢別による受動文の使用傾向

		使用	不使用	使用率
場面Ⅰ(a)	若(75)	71	4	94.7%
	中(66)	65	1	98.5%
場面Ⅰ(b)	若(75)	65	10	86.7%
	中(66)	56	10	84.8%
場面Ⅱ(c)	若(75)	69	6	92.0%
	中(66)	64	2	97.0%
場面Ⅱ(d)	若(75)	▽70	▲5	93.3%
	中(66)	▲66	▽0	100%
場面Ⅲ	若(75)	24	51	32.0%
	中(64)	16	48	25.0%
場面Ⅳ	若(75)	68	7	90.7%
	中(64)	54	10	84.4%

▲有意に多い ▽有意に少ない ( $p \leq .05$ )

問題であって、場面Ⅰ、Ⅱの両場面ともに日本語母語話者の「立場志向」(水谷, 1985)を顕著に示していると言える。

場面Ⅲでは見知らぬ二人の子供のけんかであるため、視点の置き方が統一されず、久野(1978)の言う話し手の共感がどちらの要素に向けられるかが問題となっているようである。回答者数人にインタビューしたところ、場面Ⅲでは力の関係で殴っている子どもに始点が向き、場面Ⅳでは子どもと犬という関係から子供のほうに視点が向くのだという答えが返ってきた。しかし示した絵の影響もあることから、人物の配置や、大きさなども視点の選択に影響を与えているかもしれない。

## VII. ま と め

本調査では日本語母語話者の受動文に対する許容と、受動文の使用傾向を明らかにすることを目的とした。分析の結果以下のことが明らかになった。

- 1) 18例中16例において、母語話者による自然・不自然の判断はほぼ一致していた。
  - 2) 母語話者の回答が100%一致していた例は1例(15)であった。
  - 3) 持ち主の受動文(17)、第3者の受動文(3)に選択の揺れが見られた。
  - 4) 年齢別では、若年層と中年層の間に選択の差が見られる受動文があった。
  - 5) 絵を見せて状況を示した場面Ⅰから場面Ⅳの内、場面Ⅲを除いた全ての場面で高い受動文使用率が見られた。
  - 6) 場面Ⅲ、場面Ⅳと同じ客観的な出来事を話す場合でも、受動文使用と能動文使用の二つに選択が分かれた。
- 日本語母語話者でも言葉の捉え方は様々であり、完全な認識の一致がなかったことは、言語がいつも流動的に変化していることの表れではないだろうか。年齢別での差がわずかに見えたことも、世代間の言語感覚に差があることを示しているとも言え、被調査者の年齢の幅を中高生まで拡大すれば、そのことがより明確に表れるのではないかと考えられる。

## VIII. 今後の課題

今回の調査で日本語母語話者でも受動文に対する捉え方は必ずしも完全に一致するものではなく、受動文の種類や母語話者の属性によって、捉え方が少しずつ違うということが示唆された。また受動文の使用傾向についても当事者の立場なのか、第3者の立場なのかによって使用傾向にも差があったことは興味深いことであった。

しかしなぜ属性による許容率の差がおきるのか、また

第3者の立場で、ある事象をみとくときの話し手の視点の置き方の違いに深く言及することができなかった。絵が回答者に与える影響についても、左右対称や人物の大きさの違い、表情などが回答者が能動文をとるか受動文をとるかという判断に影響を及ぼすことも考えられる。

今後はこの日本語母語話者データを基にして、トルコ人日本語学習者は学習によって受動文をどのように認識しているのか、日本語母語話者と同じような傾向を示すのかどうかを解明していきたい。そして今回明らかにできなかった上記の課題についてもさらに考察を深めたい。

## 注 釈

注1) アンケート中の18の例文は、参考書や教科書の文を引用し、場合によっては著者の判断で一部変更、または加筆を行って作例したものである。

注2) 各受動文の検定結果: {(6)両側検定(以下「両」):  $t(1) = 5.18, p < .05$  } {(14)両  $t(1) = 7.70, p < .05$  } {(4)両  $t(1) = 4.17, p < .05$  } {(7)両  $t(1) = 5.11, p < .05$  } {(10)両  $t(1) = 3.90, p < .05$  }

注3) 有意傾向が見られた表3の受動文(5)と表4の受動文(1)(16)の検定結果: {(5)両  $t(1) = 3.05, .05 < p < .10$  } {(1)両  $t(1) = 3.28, .05 < p < .10$  } {(16)両  $t(1) = 3.73, .05 < p < .10$  }

注4) (3)の受動文「花子は先に子供に死なれて、悲しい」は受動態の部分ではなく、「悲しい」という部分に誤りがあるという指摘を奥津敬一郎氏より受けた。すなわち本来1人称に用いるはずの感情形容詞を3人称に用いている点である。作例自体の誤りということで、本稿での考察からは除外したが、アンケートの結果、「悲しい」の不自然さではなく「死なれた」という受動態の部分に不自然さを感じるものが多数であったため、結果としては残すことにした。

## 参 考 文 献

- 大塚容子(1996)「視点と日本語関係節における受動文」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』31巻 101-114
- 奥津敬一郎(1983)「なぜ受身か?—<視点>からのケース・スタディー」『国語学』132集 65-80 国語学会
- 金水 敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164集 1-14 国語学会
- 許 明子(1996)「日本語と韓国語の受身文の実証的対照研究—両国のテレビドラマと新聞コラムにおける受身文の使用率の分析を通して—」『世界の日本語教育』9号 115-131 国際交流基金日本語国際センター

- 久野 暲 (1978)『談話の文法』大修館書店
- 坂原 茂 (2003)「ヴォイス現象の概観」『言語』第32  
巻4号 26-33 大修館書店
- 佐藤史子 (1997)「英語を母語とする日本語学習者の談  
話分析1－話し手の心理的視点と表現に関する考察  
－」『言語科学研究』第3号 43-58 神田外語大学  
大学院紀要
- 田中真理 (1991)「インドネシア語を母語とする学習者  
の作文に現れる〈受身〉についての考察」『日本語教  
育』74号 109-122 日本語教育学会
- 谷守正寛 (2000)「間接受身に対応する文についての一  
考察」『日本語教育』第107号 p45-54
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』く  
ろしお出版
- 益岡隆志 (1982)「日本語受動文の意味分析」『言語研  
究』82号 48-63 大修館書店
- 水谷信子 (1985)『日英比較 話し言葉の文法』くろし  
お出版
- 村木新次郎 (1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造の  
レベル」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森 篤嗣 (2000)「学校文法におけるヴォイスの記述に  
ついて」『日本語・日本文化研究』11号 73-83 大  
阪外国語大学
- 渡邊亜子 (1995)「中国語母語話者の日本語受身文の使  
用実態とその背景－母語との対照からの仮説設定－」  
『言語文化と日本語教育』第9号 218-228